

石井桃子

2010/11/09 国際子ども図書館

「プー」の本にかぎって、私は、あえて、分析しようとは思わない。魔法は魔法でとっておきたいからである。
(石井桃子「プーと私」『石井桃子集 6』p.13)

1. 石井桃子の仕事

①戦前 『幼ものがたり』と『クマのプーさん』

どんなことが、どんな拍子に、子どもの心に深く跡を残すかということは、私には見当もつかない。しかし、その条件については、たいへん興味をそそられる。そして、もうひとつおもしろく思われるのは、いま書いたようなことが、私自身が内がわから外界を見たようではなく、まるでもう一人の私が、自分を外がわから見ていたように、あたりの情景もろとも、心に描けることである。

(「幼ものがたり」『石井桃子集4』p.5)

埼玉県浦和生まれ (1907.3.10～2008.4.2)

記憶 『幼ものがたり』

弟の誕生(「早い記憶」)

祖父と昔話

学級文庫

子どもの感性 (「子どもの一年」石井桃子『こどもとしゃかん 66』東京子ども図書館 1995.7) 鋭敏な視力と聴力

編集

菊池寛と文藝春秋 文筆婦人会(「小学生全集」88巻)

文藝春秋で「モダン日本」「女性サロン」(昭和4～8.12)編集記者

「童女」(永井龍男『東京の横町』講談社 1991.1) **子ども性**

漢籍整理(犬養毅 犬養道子『花々と星々と』1969)

『プー横町にたった家』昭和8年12月

『日本少国民文庫』(全16巻 新潮社 S.10.11-12.8) 山本有三 吉野源三郎 恒藤恭 里見弴 「文章の呼吸」

翻訳「一握りの土」(ヴァン・ダイク作)「わが樞犬ブリン」(グレンフェル作) (『世界名作選(二)』山本有三選 1936.12)

②戦中 白林少年館と『ノンちゃん雲に乗る』

あるくもつた日、わたくしは高台のある駅の、高いプラツフォームに腰をかけて、電車を待つていました。走ってくる電車の上に、きゆうに日がさして、パツとかがやき、電車はその光をのせたまま、わたくしほうへ突進してきました。わたくしは目がくらみそうになり、その光の中に、さいしょのノンちゃんを見たのです。

(『ノンちゃん雲に乗る』あとがき 光文社 昭和26年4月初版)

白林少年館 昭和13年(1938)?

①白林少年館(児童図書館) 「とびたとうとする鳥」(『家庭文庫研究会会報』第1号 1958 冊子資料 p.8)

四谷(冊子資料 口絵写真) 犬養仲子

②白林少年館(出版部) 吉野源三郎・小林勇 「あたたかい人」(『回想 小林勇』)

昭和15年11月 『たのしい川邊』(中野好夫訳 白林少年館)

昭和16年1月 『ドリトル先生「アフリカ行き」』(井伏鱒二訳 白林少年館)

『クマのプーさん』の翻訳

昭和15年12月 『熊のプーさん』(石井桃子訳 岩波書店)

昭和17年6月 『プー横丁にたった家』(石井桃子訳 岩波書店)←昭和8年12月

「あの文体は児童書の規矩を逸脱…、破調、破格が…全体を新鮮で大胆なものに」(生野幸吉)

「真の新風革命を樹立した」(瀬田貞二)

『ノンちゃん雲に乗る』執筆 吉田甲子太郎 藤田圭雄 (大地書房 1947.2 発行 野上彰編集)

③戦後 多彩な仕事－編集・翻訳・批評・図書館・創作

ずいぶん前、私はふたつのことをしたいと考えていた。一つは、小さい農場を経営(というほど大げさなことではなかったが)することと、子どもの図書室をつくることだった。

(「子どもの本屋」1952 『石井桃子集7』p.3)

『岩波少年文庫』1950.12 創刊 (「少年少女讀物百種」委員会のリスト)

「私にとって『喜びの訪れ』と感じられる本のリスト作り熱中していった」(石井桃子「喜びの地下水」『図書』1990.7)

『岩波の子どもの本』1953.12 創刊

『子どもと文学』(いすみ会)

『線路ぎわの子どもたち』イーディス・ネスビット作 “The Railway Children, 1906” 中川宗弥さし絵

『子とともに』1965.4-1966.3 愛知県小中学校校長会・愛知県小中学校PTA連絡協議会編集 愛知県教育振興会発行

2. 子どもの図書館－よろこびの地下水

「あのとき、あなたは、病気の友だちのために『プー』を訳したことを話してくれたね」とスミスさんはいった。
「あなたは、あのとき、ある本にクリエイティブなものがあるとき、その本は、ほんとうの『本』になるのだとおっしゃいましたね。そして、創造性と真実をもった本を識別し、それを次の代に手渡すのが図書館の役目だって。」と、私はいった。「私は、いまでもそれを信じているんです。」
「モモコ、信じること、それがだいじなことなんだよ。」とスミスさんはいった。（『児童文学の旅』『石井桃子集 6』p.303-304）

かつら文庫 昭和 33(1958)年3月1日 発足

1954 年渡米 “How exciting! How challenging!”（『石井桃子集5』p.188-p198）

先達女性児童図書館員の姿と精神

- キャロライン・M.ヒューインズ Caroline M.Hewins (1846～1927)ハートフォード市図書館
- アン・キャロル・ムア Anne Carroll Moore (1871～1961) ニューヨーク公共図書館
- リリアン・スミス Lillian Helena Smith (1887-1983) カナダ・トロント公共図書館

『児童文学の旅』「一九七二年初夏 イギリスへの旅」を一年間『図書』に連載 (1973.1～12)（『石井桃子集 6』1999）

『子どもの図書館』（岩波新書 1965.5）（新編子どもの図書館『石井桃子集 5』1999）

『子どもと本の世界に生きて 一児童図書館員のあゆんだ道』アイリーン・コルウェル著 石井桃子訳 こぐま社 1994

『児童文学論－児童文学の批判的考察』リリアン・スミス著 石井桃子[ほか]訳 岩波書店 1964.4

『子どもの読書の導きかた』石井桃子著 国土社 1960.6

新しい視野－ポンピドゥー・センター図書館（中村真一郎「近代文学館への夢」『日本近代文学館館報』1994.9-11）

3. 石井桃子の文学－クリエイティブ

「六〇年代のはじめ、僕等は頭でっかちに「児童文学」を論じていた。性急な問題意識で、既成の作品を斬りすてていた。それなのに、この人には手が出せない。自分達の論点を超えて、否定のしようのない魅力があるのだ。…僕等は石井桃子氏を別格官幣大社扱いとせざるを得なかった。」（宮崎 駿 「石井桃子集」パンフレット 1998）

『ノンちゃん雲に乗る』（光文社 昭和 26 年） 第一回(芸術選奨)文部大臣賞

「子どもの論理の発見」

「トムの教育」（『少年少女』昭和 23 年 3 月号 中央公論社）

「緑色の消防自動車」翻訳 モート・コーニン作（『少年少女』昭和 23 年 8/9 月号 中央公論社）

「山のさち」随筆（『銀河』昭和 23 年 5 月号 新潮社）

「おソバの茎はなぜ赤い」（『銀河』昭和 24 年 5 月号 新潮社）

短編

「草ぼうぼうの原っぱ」（毎日新聞 1952.2.9）「ハツコマ山登山」（時事新報 1951.7）

「セミとり」（読売新聞 1953.8.29） 以上3点『石井桃子集7』所収

『昭和児童文学全集 18 北畠八穂・石井桃子集』（東西文明社 1958）

「パチンコ玉のテボちゃん」「秘密」「ハツコマ山登山」（以上、1951 年作）「ある山のかげで」（1953）「さんちゃん」とバス」（1957）「山のトムさん（抄）」 からだも心もじょうぶに自分の足で立つ人になってください（サイン）

単行本

『三月ひなのつき』（朝倉撰絵 1963）『べんけいとおとみさん』（山脇百合子絵 福音館書店 1985）

『山のトムさん』『幼ものがたり』『迷子の天使』

『幻の朱い実』（上・下） 「人生の幸福は重大な事件ではなく、日常の些事によって決まる」（埼玉新聞 1994.4.18）

「子どもにうったえる文章」石井桃子（『現代作文講座3 作文の条件』明治書院 1977）

①形容詞が少ないこと

②説明(描写)がないこと

③感情が抑制されていること

簡素な力強さの芸術－北欧の作家（『第 4 章散文芸術論1』『ラフカディオ・ハーン著作集7』恒文社 1985.2）

昔話に学ぶ

『ちいさなねこ』

「石井さんが訳文を経験深いおとなの眼で点検したというよりは、すなおに読み、こどもの立場そのものに自分を置いてわかりにくい箇所不審を感じたのだということである」（生野幸吉「遠いこと近いこと」）

「別格官幣大社」（宮崎 駿）

「ある本にクリエイティブなものがあるとき、その本は、ほんとうの『本』になる」